小林市文化財調査報告書第１集

水落（みずおとし）遺跡

県営出の山地区圃場整備事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1990
宮崎県
小林市教育委員会

水落遺跡正誤表

	誤	正
２頁　３行目	場）、太平	場）・太平
９頁２０行目	黄橙色	黄橙色土層
９頁２８行目	Ｄ－１１	ｄ－１１
１５頁　４行目	井の山地区	出の山地区
１５頁１１行目	住居後	住居跡
１５頁３０行目	境はっきりしない	境は、はっきりしない
１６頁　６行目	３３８㎝	３８㎝
２０頁	竪穴住居実測図	Ｂ地区３号住居実測図
２３頁　６行目	図６	図８

上記のとおり、訂正してお詫び申し上げます。

序

この報告は、平成元年度県営圃場整備事業に伴ない、西諸県農林振興局の委託を受けて、小林市の南部地区に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査をした記録であります。　平成元年９月から同年12月までの発掘調査の結果、弥生土器片４，３４９個、石器９９４個、中世陶器片８３個、鉄製品６４個、玉５個、銅銭（寛永通宝）９７枚、木片５個等数多くの遺物及び遺構が発見されました。

これらの貴重な遺物とともに、市史解明の資料となることは、ひいては郷土愛の機運を醸成することになり、誠に意義深いものがあります。学校教育、社会教育、或いは文化財保護のため広く活用をいただきたいと思います。

本事業の推進に、ご指導とご協力をいただきました宮崎県教育委員会文化課、西諸県農林振興局、出の山土地改良区等関係各位に対し深甚の謝意を表しますとともに、発掘作業に従事くださいました皆様に対しても、厚くお礼を申し上げます。

平成２年３月

小林市教育委員会

教育長　山口　寅一郎

例　　言

1　本書は、小林市出の山地区の県営圃場整備事業に伴ない、平成元年度に実施した水落遺跡の発掘調査概要報告書である。

2　発掘調査は、小林市教育委員会が主体となり、県文化主任主事長津宗重（一次調査）・主事長友郁子（二次調査）が担当した。

3　調査組織は次の通りである。

調査主体	小林市教育委員会		
	教育長		山口寅一郎
	社会教育課長		川畑正一
	同係長		黒木英夫
	同係員		上別府　優
特別調査員	長崎大学医学部教授		松下孝幸
調査員	県文化課	主任主事	長津宗重（一次調査担当）
		主事	長友郁子（二次調査担当）
		主査	宍戸　章
		主事	吉本正典

4　本書の執筆は、黒木英夫・長津宗重・長友郁子が分担し、文責については目次に明記している。

5　土器の色調は農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帖による。本報告の方位は磁北である。またレベルは海抜絶対高である。

本 文 目 次

第Ⅰ章　序説
第１節　発掘調査に至る経過　黒木 …… 1
第２節　小林市の歴史的環境　長津 …… 1

第Ⅱ章　水落遺跡Ａ地区の調査　長津
第１節　発掘調査の概要 …… 9
第２節　包含層の状態 …… 9
第３節　中世の遺構と遺物 …… 9
第４節　小結 …… １０

第Ⅲ章　水落遺跡Ｂ地区の調査　長友
第１節　調査区の設定と概要 …… １５
第２節　層序 …… １５
第３節　弥生時代の遺構と遺物 …… １６
第４節　中世の遺構と遺物 …… １６
第５節　近世の遺構と遺物 …… １９
第６節　小結 …… ２３

第Ⅳ章　まとめ　長津

挿 図 目 次

第１図　小林市の遺跡分布図
第２図　水落遺跡Ａ・Ｂ地区全体図
第３図　Ａ地区遺構分布図
第４図　Ｂ地区基本層序
第５図　Ｂ地区遺構分布図
第６図　Ｂ地区３号住居実測図
第７図　Ｂ地区出土弥生土器実測図（Ｉ）

第８図　Ｂ地区出土弥生土器実測図（Ⅱ）

表　目　次

第１表　Ｂ地区出土弥生土器観察表

図　版　目　次

図版１　Ａ地区遠景（西から）・Ａ地区全景
図版２　Ａ地区掘立柱建物群・Ａ地区１号掘立柱建物
図版３　Ｂ地区全景・Ｂ地区３号住居
図版４　Ｂ地区近世墓群全景・線刻土器出土状況

第Ⅰ章　序　　説

第１節　発掘調査に至る経緯

宮崎県西諸県農林振興局では、昭和６２年度から出の山地区圃場整備事業を実施している。平成元年度工事実施予定地内には遺跡は知られていなかったが、県文化課の分布調査で土器散布地等が確認された。また、隣接地に「夷守駅」の推定地が所在していたので、県文化課では昭和６３年１２月試掘調査を実施した。その結果、予定地内で弥生時代頃の遺跡が２ケ所（水落遺跡、中島遺跡）所在することが確認された。なお「夷守駅」に関する遺構等は確認されていない。聞き取り調査では、細野小学校の北東の墓地内では墓地造成中、地下式横穴墓と推定される内面に朱を塗った空洞が発見されている。

そして、この工事予定地内で遺跡の所在が確認されたため、西諸県農林振興局、出の山土地改良区、県文化課、市教育委員会の４者で協議を行った結果、工事により包含層等が削平を受ける部分と道路部分は、発掘調査の措置を取ることになった。水落遺跡の発掘調査対象地は広範囲で調査期間に数か月を要することから、稲収穫後に調査着手したのでは工期に影響するため、一部稲の転作を行い調査期間を確保することになった。

発掘調査は、水落遺跡Ａ地区を平成元年９月４日から１０月３０日まで県文化課主任主事長津宗重氏の担当で実施し、水落遺跡Ｂ地区は１１月７日から１２月２７日まで県文化課主事長友郁子氏の担当で実施した。また、中島遺跡については道路部分のみを１２月に実施した。

第２節　小林市内の歴史的環境

小林盆地は北の裏日向山地、東の諸県山地北西支脈、南の霧島火山、西の加久藤盆地に囲まれた凹地である。裏日向山地の南には加久藤火砕岩と溶結岩の丘陵地が広がり、霧島火山の北と東には溶岩流末端から形成された新・旧の扇状地が開析されて、下位及び中位の段丘が広がる。盆地内には石氷川などの小河川が流れ、合流して岩瀬川となって東に流れている。盆地底の大部分はシラス台地とそれが浸食されて形成された段丘であり、最低位に氾濫原性低地がかなり広がる。(1)

水落遺跡の歴史的環境を知るために、町内の遺跡を時代順に概観する。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は確認されていないが、東隣りの野尻町の新村・高山遺跡(2)でナイフ形石器、剥片・掻器が出土しているので近い将来当市でも確認されると思われる。

縄 文 時 代

縄文時代早期の遺跡としては本田遺跡[3]（大字東方字坂下）・平木場遺跡[4]（大字南西方字平木場）、大平遺跡[5]（大字北西方二区字大平）・内木場遺跡[5]（大字東方字集）・上永久井野[6]・城山[7]などが知られている。本田遺跡は当市の北側の浜瀬川を東に臨む丘陵上に位置し、昭和４１年に調査された結果、押型文（楕円・山形）土器　・前平式土器・塞ノ神式土器が出土したが、塞ノ神式土器の出土量は少ない。平木場遺跡は当市の南西のえびの市と境を接する平木場台地の南側に位置し、昭和４７年に九州縦貫自動車道に伴なって調査された結果、楕円押型文土器が出土している。大平遺跡では塞ノ神式土器が、内木場遺跡では楕円・山形押型文土器が表採されている。また黒仁田出土の磨製の環状石斧は注目される。しかし、集石遺構などのこの時期の遺構は当地域では検出されていない。

前期の遺跡としては、本田遺跡・平木場遺跡・新田場遺跡（大字真方三区字新田場）などが知られている。本田遺跡は昭和４１年の調査によって県内でも有数の前期の遺跡であることが明らかになり、曽畑式土器が出土すると伴に住居の一部が確認された。前期の住居としては県内唯一であり、注目される。曽畑式土器はⅡ式とⅢ式[8]が出土している。当遺跡の石器組成は石鏃・石斧・石槍であり、特に石鏃の割合が高い。石鏃の石材としてはチャートが多く使用されている。出土している黒耀石は姫島産や腰岳産のものはなく、「霧島産」である。当地域は立地的に「霧島産」の割合が非常に高いが、西方では日東産と姫島産が、出の山では日東産が表採されている[9]。平木場遺跡で出土した曽畑式土器は刺突文や直線文で構成されたⅢ式である。当遺跡の石器組成は石鏃・石匙・磨製石斧などである。新田場遺跡でも曽畑式土器が表採されている。

1　水落遺跡	2　生駒遺跡	3　平川遺跡	4　駒栗毛Ｂ遺跡
5　諏訪台遺跡	6　駒栗毛Ａ遺跡	7　出の山遺跡	8　前ノ原遺跡
9　新田遺跡	10　小林市横穴墓群	11　夷守駅推定地	12　竹山遺跡
13　竹山南遺跡	14　東牧場遺跡	15　山中遺跡	16　三ツ山城跡
17　栗巣野遺跡	18　下ノ平地下式横穴墓群	19　平木場遺跡	20　尾中原地下式横穴墓群
21　大平遺跡	22　永久津遺跡	23　黒仁田遺跡	24　正覚原古墳
25　堂山遺跡	26　永久井野遺跡	27　ひばり遺跡	28　赤松遺跡
29　本田遺跡	30　風呂ノ本遺跡	31　内木場遺跡	32　東二原地下式横穴墓群
33　新田場地下式横穴墓群	34　立山遺跡	35　上原遺跡	36　高津佐遺跡
37　集遺跡	38　城山地下式横穴墓群		

小林市内の遺跡地名表

1:50,000 霧島山
大河平
小林市
南西方
北西方
真方
東方二区
北西方三区
北西方二区
北西方一の東
南西方四区
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

第１図　遺跡分布図

中期の遺跡は県内では非常に稀薄であり、当地域でも確認されていない。

後期の遺跡としては中山前遺跡[10]（大字細野字中山ノ前）・駒栗毛遺跡[11]（大字細野字駒栗毛）・本田遺跡・立山遺跡（大字東方二区字立山）・集遺跡（大字東方字集）などが知られている。中山前遺跡は舌状丘陵の北斜面に位置し、昭和３８年の調査の結果、市来式土器・磨石などが出土した。駒栗毛遺跡は霧島連山夷守岳の北東の丘陵（標高２８８～３００ｍ）に位置し、昭和４７年に九州縦貫自動車道に伴って調査された結果、第Ⅳ層から岩崎上層式土器・市来式土器が出土し、出水式土器類似した土器も出土している。当遺跡では市来式土器と岩崎上層式土器の上下関係を層位によって確認している。本田遺跡では西平式土器が出土している。立山遺跡・集遺跡では市来式土器が出土している。

弥　生　時　代

生駒出土の両端えぐりの方形石庖丁・尾中原出土の長頸壺、細野出土の重弧文土器が特に知られているが、調査はあまり行われていない。平松遺跡は平成元年に圃場整備事業に伴なって調査された結果、後期の土器が出土した。今回の水落遺跡の調査によって後期後葉～末葉の７軒の住居が検出され、その中の３号住居はベッド状遺構を有する円形プランである。また重弧文長頸壺が７号住居から出土しており注目される。

古　墳　時　代

当地域には前方後円墳・円墳はなく、地下式横穴墓と横穴墓がある。横穴墓としては小林市横穴墓（大字細野字真方）があるが、詳細は不明である。

地下式横穴墓としては下ノ平地下式横穴墓群（大字水流字下ノ平）・尾中原地下式横穴墓群（大字北西方字石塚尾中原）・新田場地下式横穴墓群（大字真方字松之元・新田場）・二原地下式横穴墓群（大字真方字二原）、城山地下式横穴墓群（大字細野字城山）などが調査されている。下ノ平地下式横穴墓群は大淀川の支流である岩瀬川の右岸台地に位置する。昭和５６年に調査された下ノ平１号地下式横穴墓[12]は、羨門石閉塞の平天井片袖平入りで棚状施設を有するタイプであるが、玄室と竪坑の主軸がぶれており、右壁面には格子目状と束柱の線刻がある。３体の人骨と伴に棚状施設から剣２・刀子６・鉄鏃７が出土しており、６世紀前半に比定されている。昭和６０年に調査された２号地下式横穴墓[13]は羨門石閉塞の片袖平入りの棚状施設から剣１・刀子６・鉄鏃６が出土した。

尾中原地下式横穴墓群は標高約２８０ｍの小高い台地の南斜面に位置する。昭和39年以前に数基の地下式横穴墓が発見され、朱玉・剣・刀・刀子・鉄鏃などが出土しているが、詳細は不明である[14]。昭和39年に調査された地下式横穴墓[15]は竪坑上部石閉塞の平入りで棚状施設を有するタイプであり、左右の壁面には束柱が浮彫りされている。玄室の床面と棚状施設から剣３・鉄鏃５が出土した。

新田場地下式横穴墓群は岩瀬川とその支流に挟まれた標高２１０～２３０ｍの二原台地の南端に位置する。現在までに１０基以上発見されているが、昭和50年以前に発見された６基については詳細は不明である。松之元の２グループと新田場の１グループの計３グループに分かれる。出土品の中には双脚状鉄器があり注目される。昭和５０年に調査された地下式横穴墓[16]は羨門石閉塞の妻入りで棚状施設を有するタイプであり、２体の人骨と伴に剣１・刀子１・鉄鏃３が出土している。昭和６０年に圃場整備事業に伴って調査された７基の地下式横穴墓[17]は１号地下式横穴墓の竪坑上部石閉塞を除くと、その他は羨門石閉塞と羨門板閉塞の片袖平入りの棚状施設を有するタイプである。剣・刀子・鉄鏃・斧・鉇・鍬先・鎌・釣針などが出土しており、５世紀後半～６世紀前半に比定される。

二原地下式横穴墓群は新田場地下式横穴墓群の北約８００ｍに位置する。昭和６０年に調査された１号地下式横穴墓[18]は羨道石閉塞の両袖平入りのタイプで、床面から刀子２・鉄鏃４が出土した。また平成元年１２月～２年２月に圃場整備事業に伴って１５基（２号～１６号）が調査されているが[19]羨道石閉塞の両袖平入りの棚状施設を有するタイプである。２号地下式横穴墓から直径５．０cmの珠文鏡が、８号地下式横穴から貝輪が出土しており注目されるが、基本的には剣・刀・刀子・鉄鏃の組み合わせである。計２１体の人骨が検出されており、１１号地下式横穴墓の５体が最大の被葬者である。また二重周溝を有する直径約２７ｍ、高さ３．６ｍの円墳が確認されており、市内では初例であり注目される。

城山地下式横穴墓群[20]は辻の堂川を北に臨む標高２３０ｍの小規模な台地に位置し、昭和１４年以前に２基発見されているが、詳細は不明である

当地域の地下式横穴墓は羨門石閉塞の片袖平入りで棚状施設を有するタイプであり、棚状施設に剣・刀・鏃などの武器を副葬することに特徴があるが、須恵器・土師器などの土器が玄室内に副葬されることがない。また川内川上流のえびの市を中心に分布する竪坑上部石閉塞もわずかであるが見られる。

平木場遺跡では一辺４４０cmの規模の方形プランの住居の一部が検出されており、炉から土師器が、柱の西側から須恵器の甕が出土している。駒栗毛遺跡では長軸１８５cm、短軸１５０cm、深さ４０cmの楕円形プランの土壙が検出され、土師器・須恵器が出土している。

歴　史　時　代

『延喜式』によると日向国の駅馬は１６駅あり、そのうちの夷守駅は大字細野字夷守に地名が残ることからこの地に比定されている[21]。推定地は水落遺跡から南へ約１kmの地点である。

平安時代の遺跡として竹山遺跡[22]（大字細野字竹山）・駒栗毛遺跡が知られている。竹山遺跡は南北に伸びる丘陵の南斜面に位置し、昭和４７年に九州縦貫自動車道に伴って調査された結

果、柱穴群が検出され、土師器の高台付きの椀・内黒土器・ヘラ切り底の坏・布痕土器などが出土した。駒栗毛遺跡でも布痕土器が出土している。

中世の山城としては三ツ山城（大字真方）・小林城・内木場城・野首城・岩牟礼城・宇賀城がある。[23] 三ツ山城は北原氏の居城であり、本丸・二の丸・大手口の跡が残っている。

今回の調査でまとまって４３基も近世墓が検出されたのは、江戸時代終りの墓地の構造・変遷を考える点で注目される。

当地域の発掘調査はようやく端緒についたばかりであり、地域史を具体的に描きだせるまでには至っていない。今後の調査に期待することが大である。

註

(1) 経済企画庁総合開発局『土地分類図（宮崎県）』昭和４９年
(2) 日高孝治　「新村遺跡・高山遺跡」『野尻町文化財調査報告書』第１集　野尻町教育委員会　昭和６１年
(3) 鈴木重治　「小林市本田遺跡の調査」『昭和４１年度西日本史学会秋季学術大会発表要旨』『九州考古学』第３２号所収　昭和４２年
　鈴木重治　「本田遺跡」『宮崎県史　資料編　考古１』　宮崎県　平成元年
(4) 安楽　勉　「平木場遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1)宮崎県教育委員会　昭和４８年
(5) 文化庁　『全国遺跡地図（宮崎県）』　昭和４３年
(6) 宮崎県総合博物館『宮崎県総合博物館収蔵資料目録　考古・歴史資料編』昭和５８年
(7) 註６に同じ
(8) 水の江和同「西北九州における曽畑式土器の諸様相」『考古学と地域文化』同志社大学　昭和６２年
(9) 坂田邦洋　「九州の黒曜石－黒曜石の産地推定に関する考古学的研究－」『史学論叢』第１３号　別府大学史学研究会　昭和５７年
　坂田邦洋　「九州産黒曜石からみた先史時代の交易について(1)」『賀川光夫先生還暦記念論集』　昭和５７年
(10) 石川恒太郎「小林市中山前遺跡調査」『宮崎県文化財調査報告書』第９輯　宮崎県教育委員会　昭和３９年
(11) 田中　茂　「こまくりげ遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1)　宮崎県教育委員会　昭和４８年
(12) 北郷泰道　「下の平地下式横穴発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第２４集　宮崎県教育委員会　昭和５６年
(13) 昭和６０年１月に小林市教育委員会が調査主体となり実施した。報告書未刊。詳細については永友良典氏より御教示頂く。
　田中　茂　「石蓋土壙墓群と地下式横穴の調査」『別冊　考古学ジャーナル』１　ニュー・サイエンス社　昭和６０年
(14) 志戸本次助『小林市史』小林市　昭和４１年
　乙益重隆　「異形鉄器」『成川遺跡』文化庁　昭和４９年
(15) 栗原文蔵　「小林市尾中原発見の地下式横穴」『宮崎県文化財調査報告書』第９輯　宮崎県教育委員会　昭和９年

⑯ 岩永哲夫　「新田場地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第２０集
宮崎県教育委員会　昭和５３年
⑰ 昭和６０年２月に小林市教育委員会が調査主体となり実施した。報告書未刊。詳細については面高哲郎氏より御教示を頂く。
面高哲郎　「新田場地下式横穴墓群」『地下式横穴墓から見た古墳時代』宮崎考古学会・鹿児島考古学会　昭和６１年
⑱ 昭和６０年２月に小林市教育委員会が調査主体となり実施した。報告書未刊。詳細については永友良典氏より御教示頂く。
田中　茂　「石蓋土壙墓群と地下式横穴の調査」『別冊　考古学ジャーナル』１
ニュー・サイエンス社　昭和６０年
⑲ 平成元年１２月から２年２月まで小林市教育委員会が調査主体となり実施した。２年３月に概要報告書が刊行される予定。詳細については長友郁子氏より御教示頂く。
⑳ 面高哲郎　「城山地下式横穴墓群」『地下式横穴墓から見た古墳時代』宮崎考古学会・鹿児島考古学会　昭和６１年
㉑ 藤岡謙二郎「日向国」『古代日本の交通路Ⅳ』大明堂　昭和５４年
㉒ 茂山　譲　「竹山遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1)宮崎県教育委員会
昭和４８年
㉓ 平部嶠南　『日向地誌』明治１７年

第Ⅱ章　水落遺跡Ａ地区の調査

第１節　発掘調査の概要

水落遺跡（小林市大字細野字水落・脇ノ上）は、宮崎市の北北西約４０㎞の標高２０８ｍ（比高１０ｍ）の丘陵上に位置する。

県営出の山地区圃場整備事業に伴って県教育委員会が昭和６３年１２月１９日から２６日まで試掘調査を行った結果、遺跡の存在が確認されたので、小林市教育委員会が調査主体となり、Ａ地区の４０００㎡とＢ地区の１００００㎡の発掘調査を行った。一次調査のＡ地区は平成元年９月４日から１０月３０日まで、二次調査のＢ地区は１１月７日から１２月２７日まで行われた。

Ａ地区からは中世の掘立柱建物７棟・溝状遺構６本が検出され、縄文時代晩期の黒色磨研土器・打製石鏃、中世の青磁・白磁・土師器などが出土した。掘立柱建物の内訳は庇付きの２間×５間が１棟、庇付きの２間×３間が２棟、２間×３間が３棟、２間×２間が１棟である。主軸は東西方向と南北方向である。

Ｂ地区からは弥生時代後期の竪穴住居７軒、中世の溝状遺構５本、江戸時代の墓４３基が検出され、弥生時代後期の土器・中世の土器（東播系の片口鉢）・六道銭（寛永通宝）などが出土した。特に７号住居から出土した重弧文長頸壺は注目される。また近世墓としてまとまって４３基も調査されたのは注目される。

第２節　包含層の状態

当遺跡の基本層序は、第Ⅰ層が褐色土層（Ｈｕｅ　７．５ＹＲ４／４・耕作土）、第Ⅱ層が黒色土層（７．５ＹＲ２／１）、第Ⅲ層が暗褐色土層（７．５ＹＲ３／４）、第Ⅳ層が黄橙色（７．５ＹＲ８／８・アカホヤ層）、第Ⅴ層が橙色土層（７．５ＹＲ６／８）である。東区は第Ⅱ層が残存しており、第Ⅲ層で遺構検出を行った。西区は第Ⅲ層が水田耕作によって既に削平されており、第Ⅳ層で遺構検出を行った。遺物は第Ⅲ層から出土する。

第３節　中世の遺構と遺物

中世の遺構はＡ地区の東区で掘立柱建物７棟・溝状遺構４本、西側で溝状遺構が２本が検出された。中世の青磁片・白磁片・土師器片などが出土した。

(1)　掘立柱建物

掘立柱建物は７棟はＡ地区の東区（ｂ－１０．１１、ｃ－１１、Ｄ－１１～１３）で検出された。７棟の内訳は庇付き３棟と庇なしの４棟である。４号掘立柱建物の庇付きの２間×５間が最大規模であるが、２間×３間が標準的な規模である。１号掘立柱建物は南北

方向が主軸であり、東面庇付きの２間×３間である。２号掘立柱建物は南北方向が主軸であり、西面庇付きの２間×３間である。３号掘立柱建物は南北方向が主軸の２間×３間である。４号は掘立柱建物は東西方向が主軸であり、南面庇付きの２間×５間である。５号掘立柱建物は東西方向が主軸の２間×３間である。６号掘立柱建物は２間×２間である。７号掘立柱建物は東西方向が主軸の２間×３間である。１号掘立柱建物は３号溝状遺構を切っている。７号掘立柱建物は５号溝状遺構によって切られている。１号掘立柱建物の柱穴から青磁片が、４号掘立柱建物の柱穴から白磁片が出土した。

⑵　溝状遺構

西区の北部（ａ－６・７）の１号溝状遺構と２号溝状遺構、東区の北部（ｂ－１０、ｃ・ｄ－１３・１４）の３～６号溝状遺構の計６本が検出された。すべてほぼ南北方向に走っている。５号溝状遺構は４号溝状遺構に切られ、両者は６号溝状遺構によって切られている。４号溝状遺構は幅４０～５０㎝、深さ２～１５㎝であるのに対して、６号溝状遺構は幅５０～６０㎝、深さ１０～１５㎝で床面に長さ５５～６５㎝、幅３５～４５㎝、深さ３～６㎝の楕円形プランのくぼみが連続している。

第４節　小結

Ａ地区からは中世の掘立柱建物７棟、溝状遺構６本が検出され、縄文時代晩期の黒色磨研土器、打製石鏃、中世の青磁、白磁、土師器などが出土した。当地区の最盛期は中世の時期である。

中世の遺構はＡ地区の東区で掘立柱建物７棟・溝状遺構４本、西区で溝状遺構２本が検出された。切りあいによる新旧関係は、３号溝状遺構→１号掘立柱建物、７掘立柱建物→５号溝状遺構、５号溝状遺構構→４号溝状遺構構→６号溝状遺構構であるのが、次の４時期に分かれる。Ⅰ期は２号掘立柱建物・５号掘立柱建物・７号掘立柱建物・３号溝状遺構、Ⅱ期は１号掘立柱建物・３号掘立柱建物・６号掘立柱建物・５号溝状遺構、Ⅲ期は４号掘立柱建物・４号溝状遺構、Ⅳ期は６号溝状遺構である。１号掘立柱建物の柱穴から青磁片が、４号掘立柱建物の柱穴から白磁片が出土しているので、Ⅱ期が鎌倉期に、Ⅲ期が室町期に比定される。一時期の３棟の掘立柱建物の単位が抽出されたが、細かい時期編年については本報告で行いたい。

第２図　水落遺跡Ａ・Ｂ地区全体図

SE3
SB1
SB2
SB3
SB4
SB5
SB6
SB7
SE4
SE5
SE6
208 25
207 50
207 75
207 25
208 00
0
10
20m

第３図　Ａ地区全体図

第Ⅲ章　水落遺跡Ｂ地区の調査

第１節　調査区の設定と概要

水落遺跡Ｂ地区は、同遺跡Ａ地点と市道を挟んだ南側に位置している。標高は約２０７ｍ、面積は約１０，０００㎡である。発掘調査は井の山地区県営圃場整備事業に伴って、平成元年１１月７日～１２月２７日まで小林市教育委員会により発掘調査が行われた。グリッドの設定はＡ地区と基準を同一にし、Ａ地区のグリッドをＢ地区にまで拡張する形で行った。

本遺跡は調査着手前は、長い期間水田であったため、表土層から遺物包含層までの厚さが４０～１００㎝あるので重機により表土剥ぎを行い、その後遺構精査を行った。遺構検出面はアカホヤ層の上層の褐色土層である。

検出された遺構はＢ地区東端部分を中心として、弥生時代の住居跡７軒、中世以降と考えられる溝状遺構５条、柱穴群、近世墓４３基他である。このうち弥生時代の住居後は、ベッド状遺構を持つもの（ＳＡ３）や、方形プランで風の当たらない東側に張り出しを持つもの（ＳＡ１）、掘り込みが褐色土の上の黒色土までしか達しておらず、遺物集中部分から住居跡の形が推測されるもの（ＳＡ４、ＳＡ７）などバラエテイーに富んでいる。この時代の主な遺物としては、長頸壺や線刻土器等がある。溝状遺構は５条ともＡ地区との間の市道を越えてＡ地区付近まで伸びていたと考えられる。遺物としては溝状遺構内からではないが東播系の片口鉢が出土している。近世墓に関しては約４５０㎡の狭い範囲から４３基が集中して見つかった。このうち１７基から１７体の人骨が出土し、六道銭として寛永通宝を持つものも１１基ある。

第２節　層序

第４図で示した土層図は、Ｂ地区中央部分で確認したものの一部である。調査区内の各所で層の厚さなどが若干異なる所もあるが、基本的な層序としては全て同一である。

第Ⅰ層：灰色軟質土

現在の水田の耕作土である。粘性は少なくパサパサしている。第Ⅱ層との境界がはっきりしておりその部分に水中の鉄分の沈殿と思われる赤褐色硬質土が２～３㎝の厚さで入っている。

第Ⅱ層：漆黒色軟質土

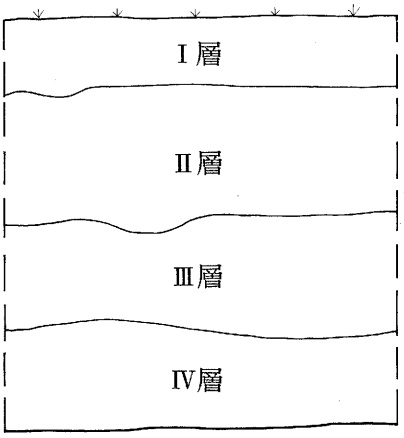
この層の下部が遺物包含層である。やや粘性を持ち、細かいパミスを疎らに含んでいる。第Ⅲ層との境はっきりしない。

第Ⅲ層：暗褐色硬質土

やや粘性を持ち硬い。第Ⅱ層から第Ⅳ層への漸位層である。当遺跡での遺構検出面である。

第Ⅳ層：橙色硬質土

純粋なアカホヤ層である。プライマリイな状態で厚く堆積している。



第４図　基本層序図

第３節　弥生時代の遺構と遺物

⑴　竪穴住居

３号住居は調査区の東端に位置している。直径６．７ｍの円形プランで、四本の柱で囲まれた方形プランの床面より約１５cm高くベッド状遺構がめぐっている。柱穴の直径は約３０cm～４０cm、深さ約３８～５６cmである。東側は一部削平されているが、遺構検出面からベッド状遺構の床面までの深さは約２２cm～３３８cmである。焼土は検出されなかった。住居内の土器は西側部分に集中している。

⑵　遺物

第８図１・２で示した土器は、『免田式』重弧文長頸壺であるが、同一固体ではない。１は、頸部の段差が顕著ではなく口縁が外反する。頸部内面には指頭圧痕がよく残っており、口縁部内面は刷毛目が施されている。外面の調整は口唇部がヨコナデであるが、それ以外はヘラミガキである。胎土の色調は外面がにぶい褐色（７・５ＹＲ　５／４）、橙色（７・５ＹＲ６／６）、内面は橙色（７・５ＹＲ６／６）である。２は胴部である。『免田式』重弧文長頸壺の文様としては典型的なものである。胴部上半はミガキを加えてから重弧文を施文しているが、その下の横方向の沈線を切っている縦方向の沈線は、上の重弧文と全て対応するものではない。胴下半の調整は刷毛目である。胴上半と胴下半が作る角度は穏やかで長胴化しており、底部は外面が橙色（７・５ＹＲ　７／６）、にぶい黄橙色（１０ＹＲ　７／４）である。

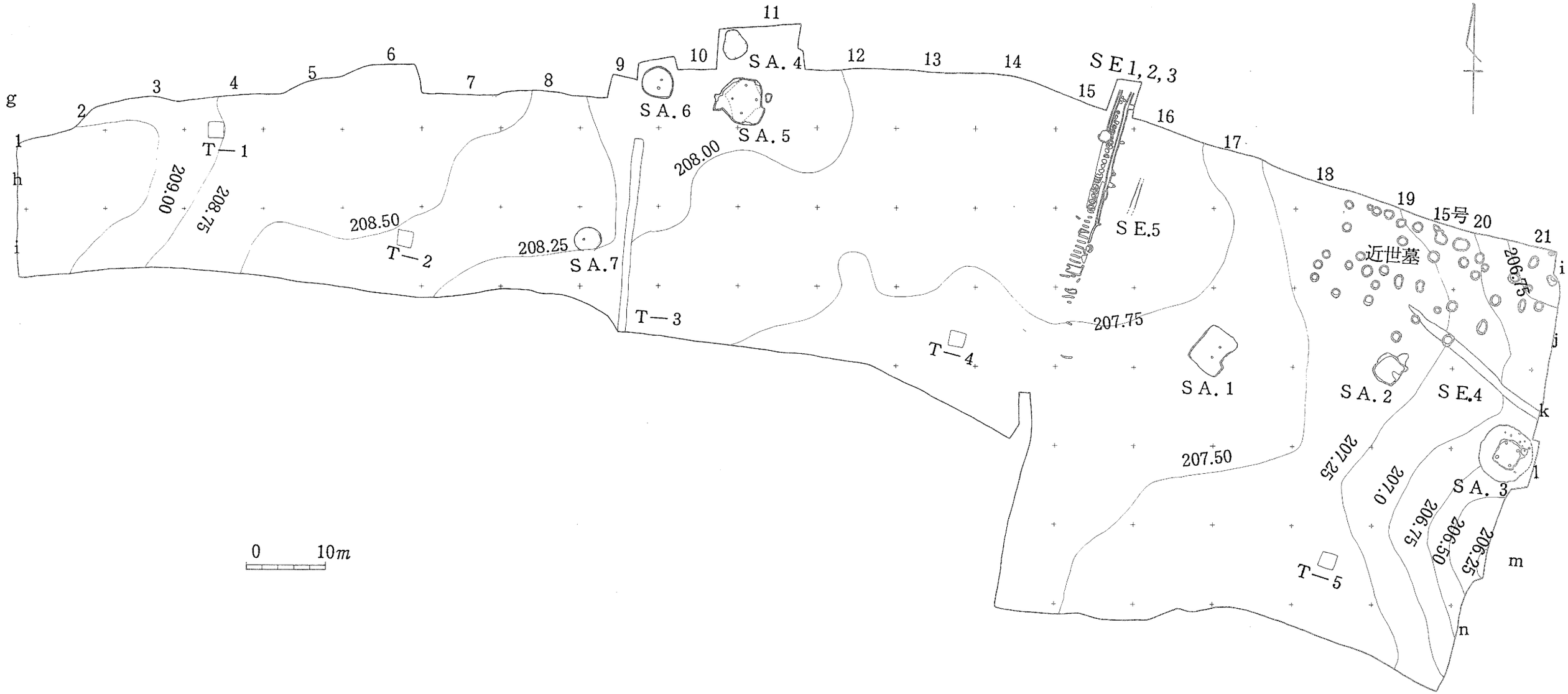
第４節　中世の遺構と遺物

⑴　溝状遺構

溝は、調査区の東側部分に集中しており、南北方向に４本（ＳＥ１～３・５）、東西方向１本（ＳＥ４）検出された。このうちＳＥ２は、Ａ区のＳＥ６と同じように幅約１．１ｍの溝の床面に幅約６０cm、長さ約４５～５５cm、深さ約８cmの楕円形状の窪みが連続している。またその両側には幅約４０cm、深さ約１０cmの溝（ＳＥ１・３）が一部伴う。いずれの溝状遺構にも供伴する遺物はない。

⑵　遺物

遺構には伴わないが、ｋ－１４区で東播系片口鉢が１点出土している。特徴としては、口縁端部を上下に軽く抓み出しており、体部内面と口縁端部の接点は稜をなしているが、体部外面と口縁端部外面の接点は丸く仕上げている。体部は直線的で内面はヨコナデにより調整されており仕上げナデは施されていないが、底部内面にはハケ目を施している。底面は半分欠如しているが、静止糸切りと考えられる。包量は口径２４．０cm、器高８．３cmである。



第５図　水落遺跡Ｂ地区遺構分布図（600分の１）

第５節　近世の遺構と遺物

⑴　近世墓

調査区の北東部の１０ｍ×４５ｍの範囲に４３基検出された。円形プランが３４基、方形プランが９基の合計４３基である。方形プランの長軸はほとんど南北方向であるが、円形プランのものに関しては真円に近い状態をしているので現在のところ長軸方向は不明である。また、４３基中１７基から１７体の人骨が出土した。

当遺跡の近世墓群の中でも特に大きな規模を誇っている１５号墳は方形プランで長軸２００cm、短軸１３２cm、深さ１４４cmである。人骨の出土状況からすると方形プランであるが、被葬者は座棺により葬られたようである。

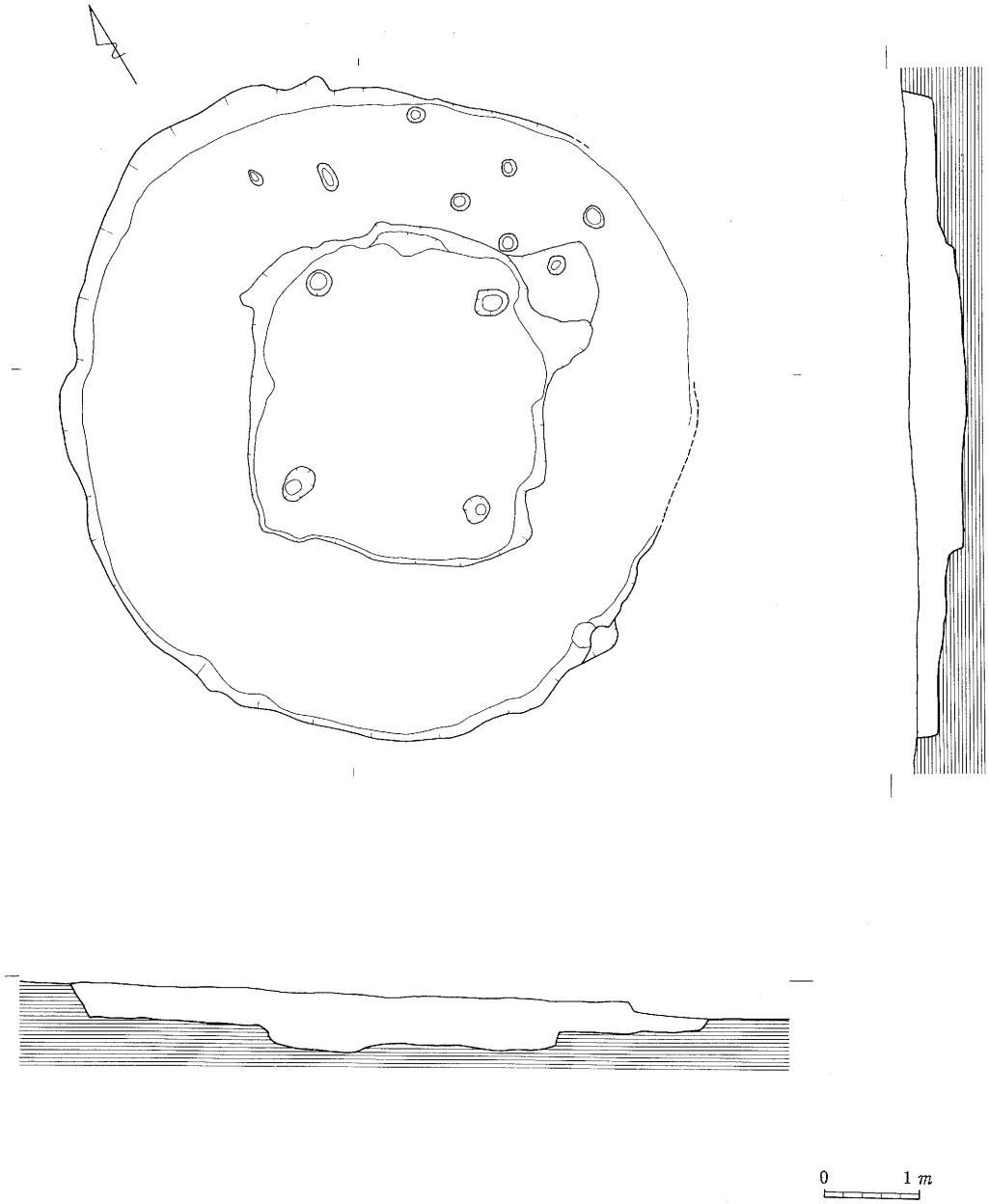
なお人骨に関しては長崎大学医学部第２解剖学教室の松下孝幸助教授に依頼し、長崎大学にて調査中である。

⑵　遺物

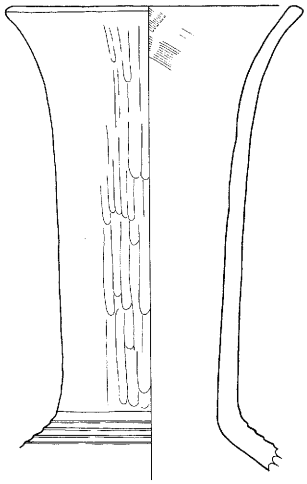
副葬品としては六道銭としての寛永通宝が１１基から９０枚出土し、外には棺の釘と推定される鉄器が２７点出土している。また、棺材が５点、陶磁器片が４点出土した。

第１表　土器観察表

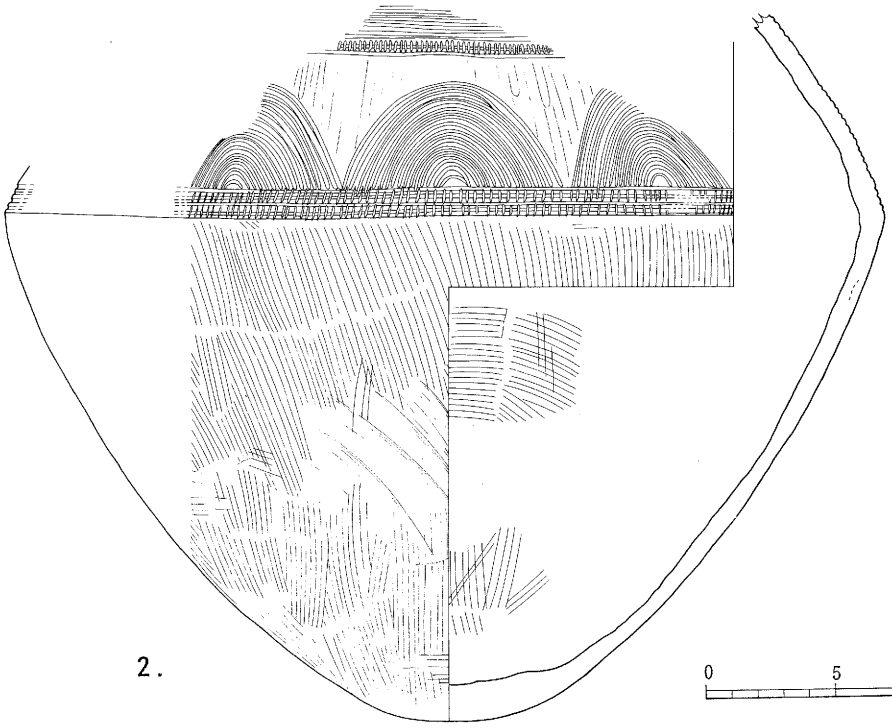
図面番号	遺構名	遺物番号	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色 外面	色 内面	胎土	備考
第７図	ＳＡ７	１	壺	口唇部…ヨコナデ 胴部…横の沈線の上に刻目 頸部…ヘラミガキ	口縁部…刷毛目 胴部…不明（削機） 頸部…指押えナデ	良好	にぶい褐 橙	橙 （５YR６/６）	１-５ mmの白、白く透明の砂粒、０.５-２ mmの無透明で光る、赤の砂粒を含む。	
第７図	ＳＡ７	２	壺	胴部（上半）横の沈線の上に刻目 重弧文 （下半）刷毛目	胴部…刷毛目	良好	橙 にぶい黄橙	（７.５YR６/６） （10YR７/４）	にぶい黄橙 褐　灰	（10YR７/３） （10YR６/１）	０.５-１ mmの無透明で光る黒、黒く光る柱状の砂粒、２-４ mmの白・茶・灰の砂粒を含む	外面スス付着 内面風化著しい
第７図	ＳＡ７	３	壺	口唇部…ヨコナデ 肩部…ナデの上に線刻文様 胴部…ナデの上に横に線状の文様 底部…ナデ	口縁部…ヨコナデ 頸部…指押えの後ヨコナデ 胴部～底部…ナデ	良好	浅黄橙 橙	（10YR８/４） （５YR７/８）	浅黄橙	（10YR８/４）	１-４ mmの無透明で光る白で光る、黒く光る柱・茶・黒・白茶の砂粒を含む	外面に赤褐色の染料付着か？
第７図	ＳＡ７	４	壺	頸部…ヨコナデ 胴部…刷毛目・刻目突帯 底部…ナデ	頸部…ヨコナデ 胴部…刷毛目の後、ていねいなナデ	良好	灰褐 橙	（５YR４/２） （５YR６/６）	にぶい黄橙	（10YR７/４）	０.５-２ mmの茶・白・灰の砂粒を含む	外面スス付着
第７図	ＳＡ７	５	壺	口縁部…ヨコナデ 胴部…刷毛目の後ナデ 底部…ナデ	口縁部…ヨコナデ 胴部～底部…ナデ	良好	浅黄橙 明黄橙	（10YR８/６） （10YR７/６）	浅黄橙	（10YR８/６）	０.５-２ mmの茶・白の砂粒を含む	全体的に風化
第７図	ＳＡ７	６	瀬	口縁部・底部…ヨコナデ 胴部…刷毛目	口縁部…ヨコナデ 胴部～底部…ナデ	良好	明黄橙 橙	（10YR６/６） （５YR６/８）	黄橙	（７.５YR７/８）	０.５-３.５ mmの黒・無色透明で光る、白・黒く光る柱上の砂粒を含む	内面底ともスス付着



第6図　竪穴住居実測図



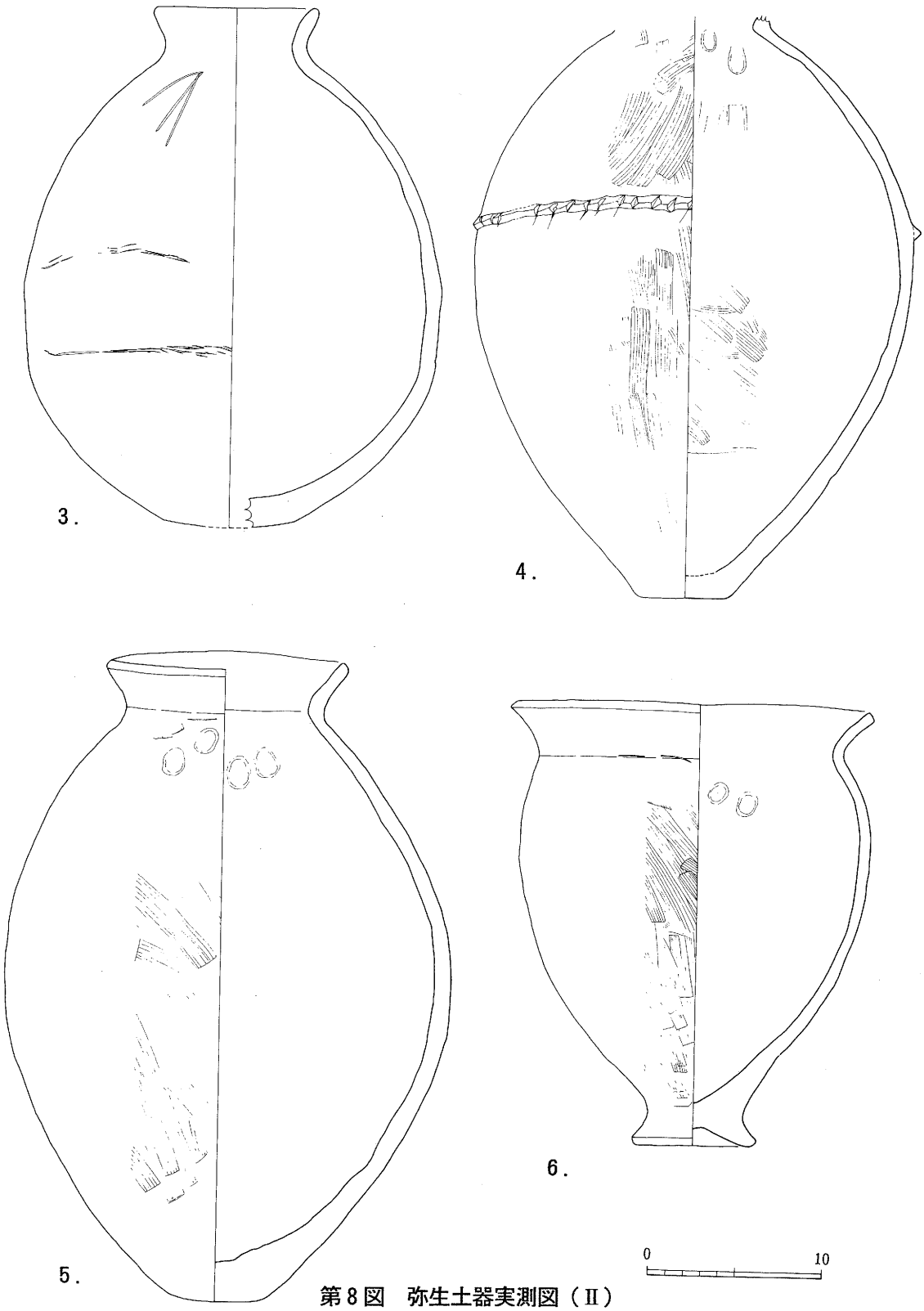
1.



2.

0　5　10cm

第7図　弥生土器実測図（Ⅰ）



第8図　弥生土器実測図（Ⅱ）

第6節　小　結

第6図で示したＳＡ３は、ベッド状遺構を持つことなどから弥生時代後期に位置付けられる。ＳＡ７から出土している重弧文土器は、いわゆる『免田式』重弧文長頸壺で、大淀川上流での住居跡からの出土は当遺跡以外では、城ケ尾遺跡（高城町）と様屋敷遺跡（高崎町）のみであり、時期については弥生時代後期後葉に比定されている。当遺跡における『免田式』重弧文長頸壺は、その形態から弥生時代の終末期に相当すると思われるが、共伴すると考えられる図6の甕は宮崎県平野部においては弥生時代後期後半となり時間的一致をみない。しかし当遺跡は山間部なので古い形式が時期が下がっても残る可能性があるのと、小林市としては弥生時代のまとまった資料の出土が今回が初めてなので当遺跡の資料をよく検討し、各住居の前後関係及び土器の前後関係、土器の編年については、本報告の中で行いたい。

東播系中世須恵器である片口鉢は、形態から森田稔氏の編年の神出第Ⅱ期ー須恵器Ⅳ期第２段階に相当するので１２世紀後半から１３世紀初頭に比定される。片口鉢の出土状況から片口鉢とＳＥ１～３は伴う可能性があるので、ＳＥ１～３は１２世紀後半から１３世紀初頭を中心とする時期に比定される。

近世墓からは六道銭として寛永通宝が出土していることから、時期としては寛永通宝が鋳造された１６３６年以降であることは確実であろう。

註

(1)　長津宗重・寺師雄二「城ケ尾跡」『高城町文化財調査報告書第１集』
平成元年

(2)　北郷泰道　「様屋敷遺跡」『高崎町文化財調査報告書第２集』平成２年刊行予定

(3)　森田　稔　「東播系中世須恵器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究」Ⅲ
昭和６２年

第Ⅳ章　まとめ

水落遺跡は、縄文時代晩期の黒色磨研土器、弥生時代後期の土器、中世の青磁、白磁、東播系の片口鉢などが出土し、弥生時代後期の竪穴住居７軒、中世の掘立柱建物７軒、溝状遺構１０本、江戸時代の近世墓４３基などが検出された。当遺跡は縄文時代晩期から江戸時代末まで営まれているが、生活空間としての最盛期はＢ地区の弥生時代後期とＡ地区の中世の時期である。

弥生時代後期の竪穴住居７軒の内訳は、円形プラン３軒・方形プラン２軒・不定形プラン２軒である。円形プランの３号住居は４本柱で囲まれた方形部分が周囲の床面より一段低くなっており、周囲はベッド状遺構を呈している。方形プランの１号住居は東から内側に張り出し部があり、入口部としての機能が想定される。これらの竪穴住居の時期は上げ底の甕や重弧文土器から後期後葉～末葉に比定される。今まで県内で調査されたこの時期の集落は日向型間仕切り住居[1]を主体とする集落ばかりであったが、当遺跡は日向型間仕切り住居で構成されない集落として注目される。円形プランの７号住居から出土した重弧文土器は長胴化し、丸底気味なので、西健一郎氏分類[2]の第４型式ｃに相当し、後期後葉の新段階に比定される。市内では細野出土[3]のものが知られており、７号住居出土のものと同じタイプである。県内では竪穴住居から重弧文土器が出土した例としては、城ケ尾遺跡[4]（高城町）と様屋敷遺跡[5]（高崎町）のみがあるだけであり、本来は大萩遺跡[6]（野尻町）の土壙墓の例のように供献土器として製作・使用されている。

中世の遺構はＡ地区の東区で掘立柱建物７棟・溝状遺構４本、西区で溝状遺構２本、Ｂ地区で溝状遺構４本が検出された。Ａ地区は遺構の切りあいによって、次の４時期に分かれる。Ⅰ期は２号掘立柱建物・５号掘立柱建物・７号掘立柱建物・３号溝状遺構、Ⅱ期は１号掘立柱建物・３号掘立柱建物・６号掘立柱建物・５号溝状遺構、Ⅲ期は４号掘立柱建物・４号溝状遺構、Ⅳ期は６号溝状遺構である。１号掘立柱建物の柱穴から青磁片が、４号掘立柱建物の柱穴から白磁片が出土しているので、Ⅱ期が鎌倉期に、Ⅲ期が室町期に比定される。Ｂ地区のＳＥＩ～３は東播系の片口鉢から１２世紀後半～１３世紀初めに比定されており、Ａ地区のⅡ期に相当する。当遺跡では一時期３棟の掘立柱建物の単位が抽出されたが、県内の中世の集落としては宮崎学園都市遺跡群の熊野原遺跡Ｃ地区[7]（宮崎市）・堂地東遺跡[8]（宮崎市）・前原北遺跡[9]（宮崎市）などが調査され、庇のついた大型の掘立柱建物とそれに付随する数軒の小型の掘立柱建物を一つの単位として考えられている[10]。またＡ地区の６号溝状遺構やＢ地区のＳＥ２に見られるように溝内に楕円形の浅い掘りこみを多数有する溝状遺構は、県内では前畑遺跡[11]（えびの市）・熊野原遺跡Ｃ地区（宮崎市）・大岩田村ノ前遺跡・松原地区第Ⅱ遺跡[12]・樺山・群元地区遺跡[13]（都城市）などで検出され、溝状遺構の性格としては道・柵列・塀の基礎・「木馬道」[14]などが想定されているが、不明な点が多い。

今回の面的な調査によって弥生時代後期の集落の構成と規模及び中世の集落の単位が確認されたのは大きな成果であった。細かい土器編年、住居変遷などの問題点については本報告書の中で明らかにしていきたい。

註

(1) 長津宗重「日向型間仕切り住居研究序説」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第２集 宮崎県教育委員会　昭和６０年

(2) 西健一郎「重弧文長頸壺」『弥生文化の研究』４　雄山閣　昭和６２年

(3) 瀬之口伝九郎・樋渡正男「日向の重弧文土器」『古代文化』第１４巻第１０号 昭和１８年

(4) 長津宗重・寺師雄二「城ケ尾遺跡」『高城町文化財調査報告書』第１集　高城町教育委員会　平成元年

(5) 昭和６３年７月～８月に高崎町が調査主体となり実施した。詳細については北郷泰道氏に御教示を頂く。本年度、『高崎町文化財調査報告書』第２集に掲載。

(6) 石川恒太郎「大萩遺跡(1)」『特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』宮崎県教育委員会　昭和５０年

(7) 面高哲郎「熊野原遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第２集　宮崎県教育委員会　昭和６０年

(8) 日高孝治「堂地東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第２集　宮崎県教育委員会　昭和６０年

(9) 北郷泰道「前原北遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第２集　宮崎県教育委員会　昭和６３年

(10) 日高孝治「日向の古代～中世ー学園都市遺跡群を中心としてー」『えとのす』第３２号 昭和６２年

(11) 北郷泰道「前畑遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(3)』宮崎県教育委員会 昭和５５年

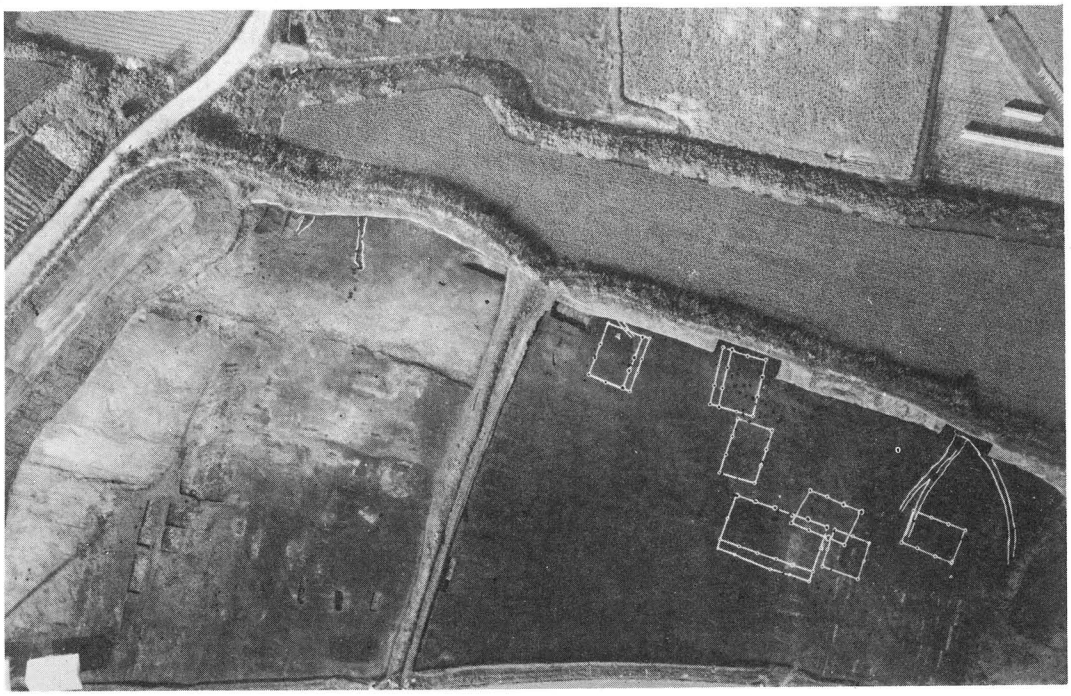
(12) 矢部喜多夫「松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」『都城市文化財調査報告書』第７集　都城市教育委員会　平成元年

(13) 近藤　協・谷口武範「樺山・郡元地区遺跡の発掘調査について」『平成元年度　埋蔵文化財担当専門職員等研修会資料』宮崎県教育委員会　平成２年

(14) 北郷泰道「東大寺虹梁と日向ー神格化の構造ー」『えとのす』第３２号　新日本教育図書　昭和６２年

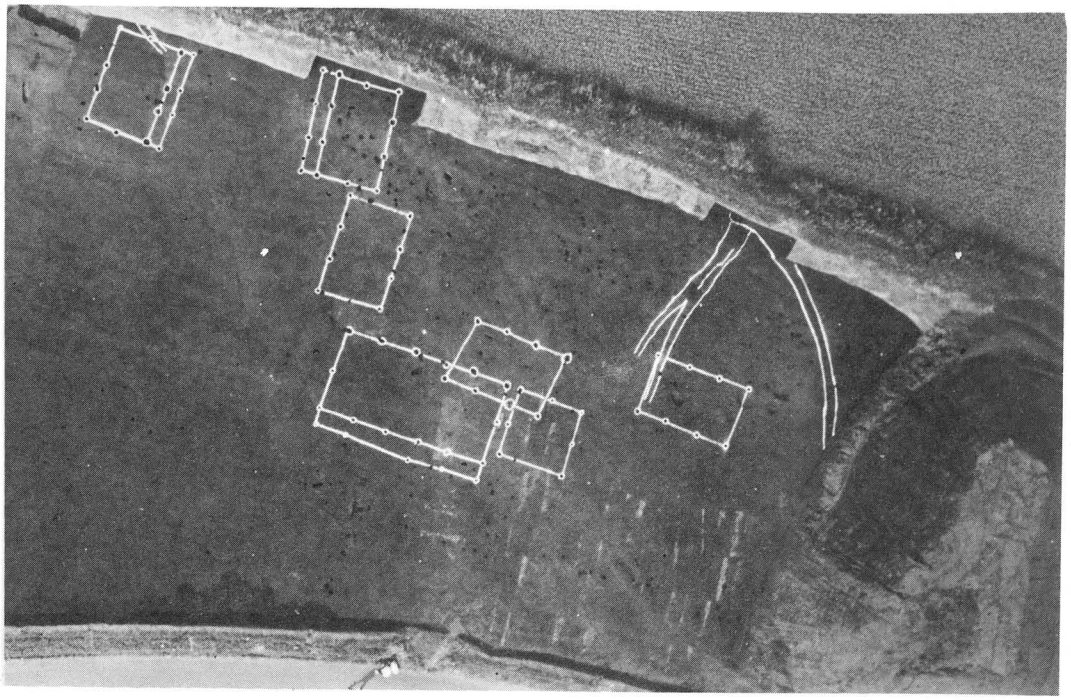
図版 1

水落遺跡A地区遠景（西から）

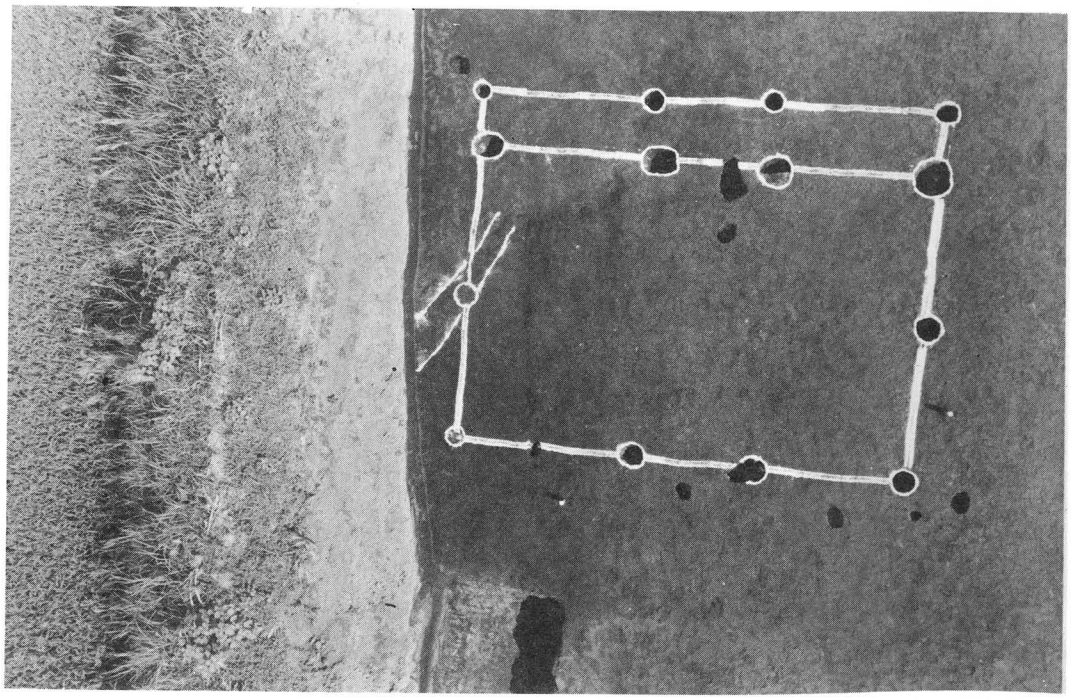


A 地 区 全 景

図 版 2



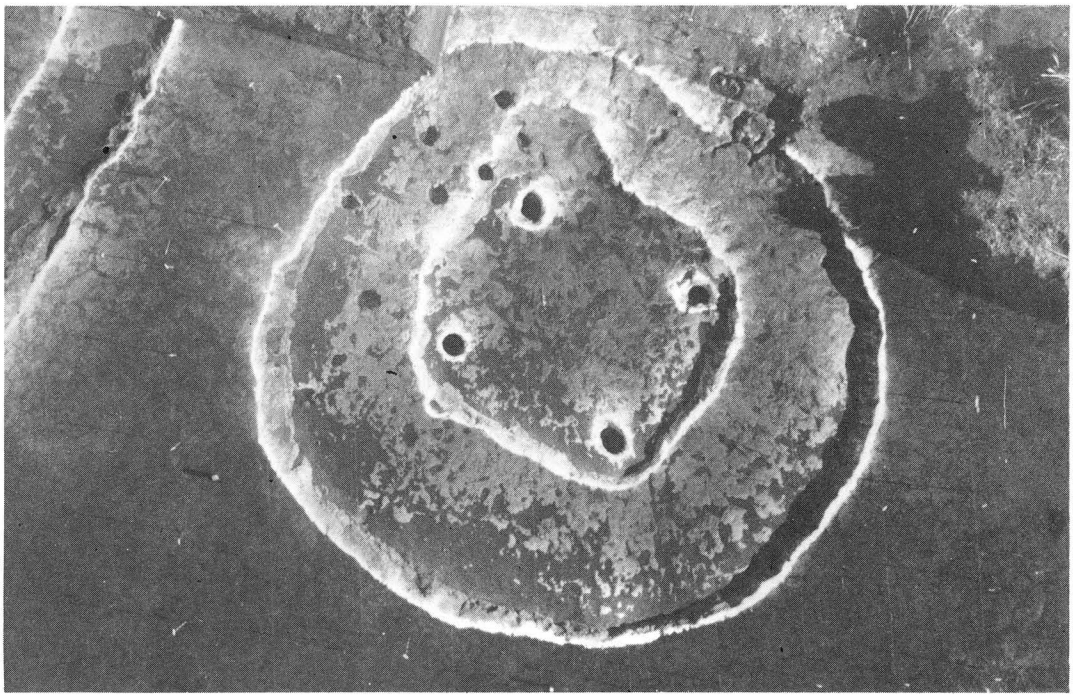
A地区掘立柱建物群



A地区1号掘立柱建物

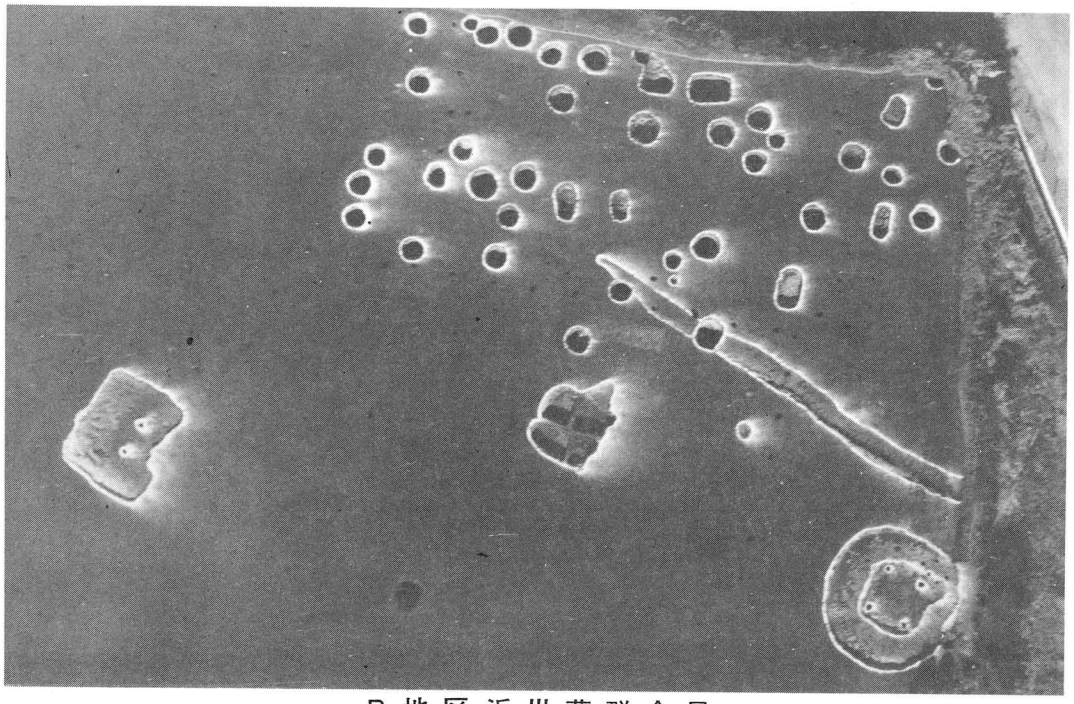
図版 3

水落遺跡 B 地区全景

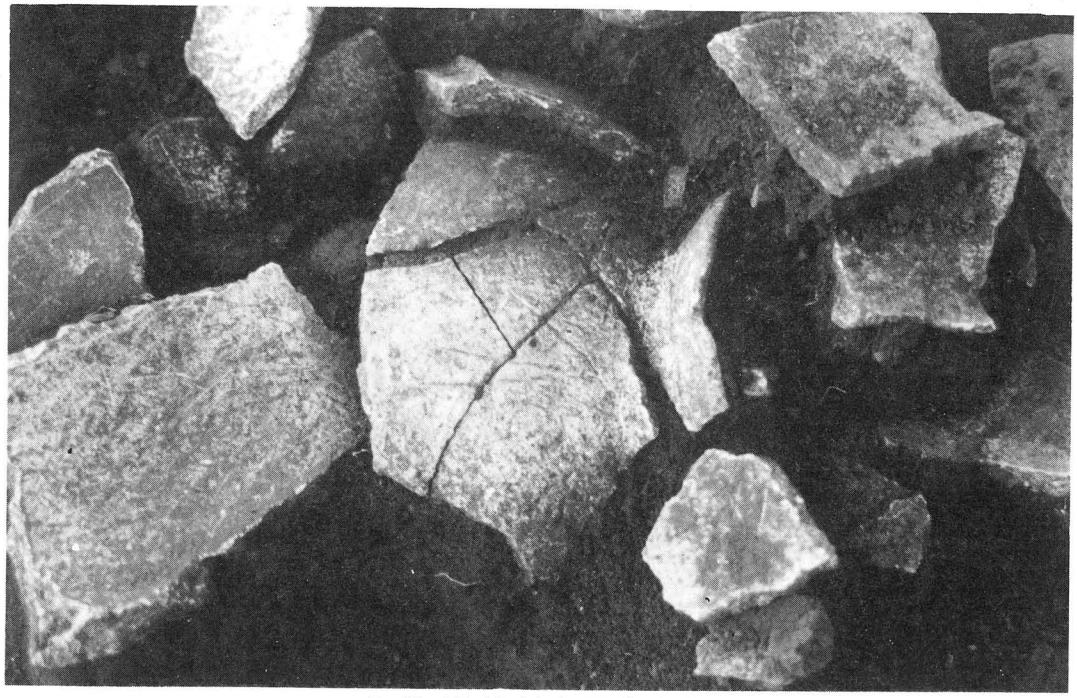


B 地区 3 号竪穴住居

図版 4



B 地区近世墓群全景



B 地区線刻土器出土状況

小林市文化財調査報告書 第1集

水　落　遺　跡

発行年月日　平成2年3月31日
編集発行　小林市教育委員会
印　　刷　小　薗　印　刷